

## 資料「新潟県における原始蓄積期の窮乏状況」その1

矢上 克己

### Poverty situation 1 of the financial funds accumulation period in Niigata

Katsumi YAGAMI

はじめに

本資料は、原始蓄積期にあたる 1879 年及び 1880 年の『新潟新聞』の記事より新潟県内の窮乏関係の記事 36 点を抽出したものである。

日本の原始蓄積期は明治元年から同 20 年代までを原始蓄積期としているが、1879 年から 1880 年のころの国内は、インフレーション下で米価を中心とする一般諸物価が高騰し、中下層農民、漁民、小工商業者および下級士族が窮乏化した。こうした中で、資本家や富農が資力や土地を集積し、一方で先に挙げた窮乏化層が生産手段を暴力的に奪われ、プロレタリア化していくのがこの時期である。

本資料は、この時期の経済不況および各種災害を背景に窮乏化する新潟県内の各市町村の惨状が詳しくレポートされており、この時期の慈善事業や公的救済を学ぶ上で、基礎的な資料を提供するものである。

なお、本稿は平成 27 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））（一般）の「新潟県社会福祉史の総合的研究」（課題番号 26234567）の研究成果の一部である。

#### ①「本港舊四五小区人民暴発ノ原因」

凡ソ天下ノ事起滅去来スル必ラス現認アラサルナシ能ク原因ニシテ未タ窮探セサル所アレハ以テ之ニ應スル方策ヲ施スヲ得サルナリ抑世ノ中ハ極メテ錯綜セル者ナレハ単ニ一原因ヨリシテ一事件ヲ起スモノ未タ曾テ之レ有ラサルナリ

原因ハ一種ニアラス之ヲ分析スレハ則チ数箇トナルヘシ即チ遠ク来ル者近ク発スル者はナリ蓋シ其遠因斯ニ成リ偶、近因ニ逢フテ忽チ相破裂ス而シ其原因ニ遠近二種ニ區別スルヲ得ルト雖モ之ヲ窮究スレハ遂ニ一大原因ニ歸スル者なり然ラハ則チ一事ノ紀起滅ニ就キ之ニ処理セント欲セハ先ツ其一大原因ヲ探リ後チ遠近ノ原因ニ及ササルヘカラス即チ其一大原因トハ所謂太極ナリ動テ兩儀四象ヲ生スル者ハ遠近二因ヲ成シ遂ニ破裂スルニ至ルナリ

明治十二年八月五日新潟港内舊四五小区漁業等ノ貧民数百群ヲ為シ警察官区吏員ニ抗シ民家四戸を毀シ同湊口ヲ閉チ街上人ヲ填シ暴民ハ屋ニ乗リ警官ハ軒に隠レ巨石飛ヒ短棹揮ヒ或ハ刀先ヲ爛々タルヲ見ル暴民遂ニ威ヲ畏レ奔脱縛ニ就ク者七名トス其夜火起リ暴民等ノ家ヲ焚ク凡ソ百戸其騒擾ハ五年一揆ノ亂以来ノ始メテ見ル所ナリ実ニ異常ノ変事トス

右ノ隠静ヲ図ラント欲セハ必ラス其原因ヲ探ラサルヲ得ス姑ク吾輩ノ所見ヲ以テスレハ其原因ノ遠ク来ル者ハ米価騰貴ニ在リ之ニ次テ近ク発スル者虎列刺予防法過嚴是レナリ而シ之ヲ推窮スレハ人心ヲ激セシメタル者ハ此レ其一大原因即チ一太極ナル者ナリ故ニ苟モ人心ヲ激セシムルノ資トナル者悉ク暴発ノ原因タラサルハナシ

然り而テ遠因ハ既ニ米価騰貴ニ在リ近因ハ予防法過嚴ノ致ス所ナリト称スト雖モ猶ホ其予防法施行ヨリ敢テ人心ヲ激セシメタル條目ヲ擧クレハ凡ソ左ノ如シ

第一或菜菓物販売禁止第二或介魚類販売禁止第三漁船検査第四虎列刺患者ノ家外人通行禁止第五虎列刺患者一切避病院送付第六避病院ノー（炎沙ノ中ニ在リ）席間（僅カ四五坪アルニ過キス）取扱（種々ノ風説アレ共未タ其確報ヲ得ス而レ共其取扱ノ不十分ナルニハ相違ナシ）ノ不完全第七焼場ノ人家接近第八患者死屍焼場ニ親戚ノ入ルヲ禁ス第九虎列刺眞假症診断ニ疑ヲ抱ク第十港口検査所ノ所置不齊第十一魚野川及信濃川通船ノ検査（本月二日ノ発令ニシ未タ実行スル者多カラサレ共兼テ評判ニテ）蓋シ右十一箇ノ近因ハ尤モ人心ヲ激セシメタル者ニシテ他ニ遠因ナキモ猶ホ破裂ノ虞ナキヲ保セス而ルニ舊四五小区邊ノ貧民猝ニ米価騰貴ニ遭ヒ一升ノ白米ヲ買フ殆ント十錢ヲ出ササルヲ得ス困窘ヲ極メ旻天ニ号泣シ訴ヘント欲スルモ其途ナキカ為メ遂ニ過日ノ如ク屢張札ヲナスニ至ルモ無智ノ人民ニ在テハ甚タ咎ムヘカラサルナリ牧民官ハ此等ノ人民ニ對スル懇偶過親待能ク其情実ヲ悉サシムルモ猶ホ且ツ安堵セシムル能ハサルヲ憂フ而ルニ甲役所に願書を捧ケテ却下セラレ乙署ニ哀ヲ請フテ省スル所ナキノ場合ニ及ンテ遂ニ此暴挙ニ及ヒタルナリ

抑人心ハ賢愚邪正ヲ論セス素ト自ラ平カナリ激スル所アラスンハ何ソ敢テ亂ヲ作シ父母妻子ヲ離レテ患苦ノ地ニ入ル好マンヤ本港四五小区人民ノ如キハ身ハ教育ヲ受ケ能ク事理ヲ明カニスル者ノミコハアラサル可シ其魚心アレハ水心ヲ生スルハ自然ノ勢ナリ予防法ノ施行ハ已□ヲ得サルニ出ツト称スト雖モ一方ノ為ス所其非難ヲ受クヘキノ點頗ル多ク特リ貧民ノ之ヲ厭忌スルニアラス中等以上ノ人ニ至テモ悉ク之ヲ満足シタル者恐クハコレナカルヘシ彼ノ暴挙ノ如キハ本港中他ノ区民ハ悉ク之ヲ惡ミタルカ將ク之ヲ憐ミタルカ抑予防法施行者ハ一般ノ嫌忌スル所トナラサリシカ牧民官ノ尤モ注意セサルヘカラサルノ要貼ナリト信ス故ニ爾後ハ務メテ寛ヲ尚ヒ人ノ厭忌スル所トナルヲ避ケサルヘカラス而シ彼暴挙ノ人民ハ所スルカ如キハ必ラスヤ寛大公明敢テ拘々焉トシテ苛刻ニ流レス以テ夫ノ激シタル人心ヲ安セシムルヲ期スベキナリ

同一情況ノ下ニハ同一ノ原因ハ必ラス同一ノ結果ヲ生ストハ蓋シ真理ナリ今回四五小区人民ハ幸ニ寛明處分セラレ其無事ヲ保ツトスト雖モ之レト同一ノ情況ノ下ニ在ル者決シテ鮮少ナラス既ニ内野如キ又新発田ノ如キ紛議スル所アリト云フ亦是レ予防法ノ事ヨリ起レリト嗚呼牧民官ハ能ク此原因ニ注意アラン?」（「本港舊四五小区人民暴発ノ原因」『新潟新聞』明治 12 年 8 月 7 日）

## ②「頑民暴挙の景況」

下町邊の漁師等新地、火葬場地蔵、願随寺、豐照校の近傍へ嘯集し異説を鳴して事を挙げんとせしを早くも其筋にて聞込れて警部巡查及び区長区書記等出張ありて漁師の頭たる〇〇〇〇を呼出され百方説諭ありて請願の趣ふきは詮議の上聞届け遣らんとの事にて一先退散したるは去る四日のことにて翌五日は新潟区臨時区會の發會にて豐照校に會議あり方時米価八錢八厘の處を七錢四厘に賣出し一時の急を救はんと照會ありし場所は願随寺にて爰の所へ漁師等は集り居たれば警部及び巡查等又々出張ありて願意及び採用の有無を懇々説諭せられしに付大抵屈伏の体なりしが其中三名ほど虎列刺病に罹り死去せし者の親屬ありて何事をも聞入る事なく只管強

情をのみ云立つる中にも米価の下落足らざる旨彼は申し募りて出張の人々は一層盡力ある處へ門前へ虎列刺病の死者を巡査が送致するを見るより頑民どもは夫こう来たれ救ってやれと一同に騒ぎ立迫駆るにぞ巡査も送棺者も猛勢に恐れて棺を捨て逃散りたる跡へ見張りの為にや巡査二名入来るを見るよりもすは捕縛に來たぞ打殺せと得物々々で打立る勢ほひ中々少人数にて制し難く警部も巡査も一先其場を引上げらるる其勢ほひに連れ寺の鐘を打鳴らし警報鐘を打立てば即時五六百人ほど集まりしは午後一時半比にて暴威逞ましく物持へ迫りて炊出しを命ぜしを急速の間に合兼ねるよし断はり云を憎しとにや其家に打て懸りしは横七番町の〇〇〇〇〇にて其家を散々に打毀し土蔵二戸前をも打破り處道具を微塵となしたり此暴挙の警報追々傳播して市中は鼎の沸くが如く店を閉ち諸道具を運搬し恰かも火元の知れぬ火災の景況又戦闘場と一般にて其混雑言べくもあらず暴徒はますます荒廻りて米商に係りたる寄附町の阿部富七及び本町通十三番町の油谷孫市が両戸を打毀ち夫より区書記宮崎七郎が説諭に盡力せしは面憎しと又其家を打毀ち舊思案小路を眞直に米商小澤七三郎が家を毀たんとす折から警察署より繰出し來たる一隊は警部を司令長として巡査新任巡査にて佩刀官棒相半し勇威凛々暴徒の唯中へ衝て入れば勇み誇りし暴徒なれども此勇勢に辟易して後ろへサッと退ぞきたり警察隊も左右なく討て懸られず備へを堅め虚実を計るを無参考の暴徒等は両側の屋根に駆上り屋根石を取って投散らす無暗滅法の攻撃を事ともせず塊石雨飛する其中を進撃あれば暴徒も虚喝を逞しくし中にも凶器を携さへて進み来る者あれば警察隊も是非なく抜刀せられ向ひ争そうさま一小戦場を現出したり(穴尾仙作は勇氣勃勃鎮静に一臂の力を添へんと思へども折あしく腹痛ゆえ見物の蔭に隠れ小さく成て見て居たり)遂に暴徒は敵し難く逃んちよなすを追撃せられ四名即座に捕縛せられし中二名は餘程の劇創を負ひたれ直ちに警察署へ送られたり暴徒は散々になりて四方へ逃失せたりといへども然れども再挙の程も圖り難しと頻りに其踪跡を探索せらるれど行方知れず追捕せられて拘引になりしは三名ありて既に黄昏となりぬ此時市中は日暮を相圖に暴徒は再挙して米商會所へ押寄來り放火すると唱へて辻々町々には組合にて張番をなし屋根へは水を揚げ軒毎に提灯を照らし警火警報嚴重なる有様なりてまた下町にては年行事或ひは物持口利者は各所に貧民をよせ集ひて或ひは暴挙を叱り或ひは貧苦を慰さめ其歎心を取り得て後ち貧民一同に代りて警察署へ嘆願したるは此後一人も暴挙致させまじきとの事にて拘引の者本町通り十四番町〇〇〇〇〇外六名を申し請ひ其親屬に對面させ其筋の仁恤莫大の冗費劇症の危篤米価の下落等懇篤に説諭せしかば素より無智蒙昧の頑民ただ一時の急迫より事起りし事なれば大いに前非後悔の色を顯はしたるよし然るに昨六日午前一時十分市中の警報も怠たり勝なる此ろ忽然下町に火の手あがりしにすは火災よと騒ぎ立れど例の再挙ならんと誰一人駆つくる者なく偶たま行者あれども徐々とのみ進み行ば火熾んになりし其場所は横七番町の裏手西請地町の〇〇〇〇〇か火元にて全くの誤まち火にて折も折のことといひ暴徒等が巢窟なれども前非を後悔せし事なればいづれも家財の運搬火災の消亡に盡力して此騒擾に乗して再挙を謀るの意なく市中は案外静謐に及びたり一体此の暴挙は本月十六日の夜禁制の盆踊りに假托し島連と合併して事を挙ん手筈の處鎖細の事より破裂して白晝に騒擾せしは尤とも策の拙なるものにて市中一般の幸福といふ可し且つ此暴挙の趣意は第一米価沸騰第二虎列刺予防の過度第三予防に付て魚類禁止の三条件なり

とぞ右火災のため延焼したるは凡そ百戸に及ぼしならんか」（「頑民暴挙の景況」『新潟新聞』明治12年8月7日）

③「貧民救助及び予防方法に就て」

貧民救助及び予防方法に就て釀金に應せし人々は一等金五百圓つつ（鍵富三作）（南半之助）二等金四百圓つつ（鈴木長八）（齋藤喜十郎）（白勢成熙）三等金三百圓つつ（村田吉藏）（新谷彦八）（奥村伊榮門）（栗林重三郎）等の数十名にて金四千七百圓あり此外四等り数名ありて金額五千圓に満ちたり（姓名は後號譲る）此金額にて救助の方法は米価一升到付き金四錢廉に売出し凡そ千五百人前の見積りなるが夫より多くならんとの見込なりとぞ」（「貧民救助及び予防方法に就て」『新潟新聞』明治12年8月8日）

④「安民策」 在新潟 文林野夫

今ヤ虎列刺病ノ劇毒本港ニ波及シ將ニ蔓延セントスルノ萌芽アリ人心アルモノ争カ之ヲ恐怖痛嘆セサランヤ故ニ上官庁ヨリ下人民ニ至リ百種ノ予薬ハ勿論早ク防御撲滅ニ孜々シ暴発漫毒ノ患ヒナカラン?ヲ欲ス而シ第一該病ノ資料トナル無血魚類未熟ノ果物類ハ悉皆販売ヲ禁止セラレ從テ其取締嚴重ナリ此ニ於テカ本港ノ漁師及ヒ果物ヲ市街ニ□ク者産業大ニ閉塞セリ特ニ此輩未ダ該病ノ猛害酸鼻スヘキ実況ヲ知得セシモノ希少ナルヲ以テ兎角官庁ノ遠慮深切ヨリ出ル該病患者及ヒ死亡者ノ處置振ヲ大ニ嫌忌シ之レヲ自己勝手ニ任セラレタリ且方今米価頗ニ騰貴ノ際其營業上ニ支障アリテハ寸時モ活路立チカタキヲ以テ此末行立方法受タキナト口実トシ苦情紛紜其筋ヘ嘆願ニ及フトカ未タ及ハサルト云ニ至リ一昨五日俄然下町邊ヘ該社会ノ徒数百人嘯集シ巨商四戸ヲ破毀シ其暴動一形ナラス幸ニ青天白日ナルヲ以テ其筋ノ警備行届放火監獄等ニ及ホサスシテ散亂セシハ実ニ幸甚ト云ヘシ

就テ此民心ヲ安治セシムルノ策如何シテ可ナラン余輩拙劣ノ及フ所ニアラスト雖モ聊カ見ル所アリ左ニ陳セン夫レ彼等ノ暴挙スルニハ真相アリ又肥料作料ヲカケ其タ種々ノ心カヲ費シ漸ク子熟ニ至リ季節ヲ失ハス相競フテ売□シ其利潤ヲ以テ一家生活スルナリ瀬海ノ漁師モ亦海面相当ノ税ヲ納メ漁具手間ノ費用ヲ見而シ其多少獲ル所ノ魚類ニ依テ糊口ヲ為スハ即同一轍ナリ而シ此ニ物ハ他ノ貨物ト異ナリ一時販売シカタク又不景氣ノ為メ典物或ハ貸借融通自在ノ使用永ク維持スヘキ物ニ非サルナリ其時々売却セラレハ忽チ敗亡腐爛シテ到底肥料トナスヨリ外ナシ故ニ彼ノ細民素ヨリ無智他ノ策略ナク其頓ニ廢物トナリヨッテ糊口シカタキヲ悲ミ情実不得止此舉ニ及フナリ故ニ斯ク販売ヲ禁止スル上ハ本港ノ有力者又ハ其筋ニ於テ相当ノ資金ヲ見込可然方法ヲ設ケ渠等カ日々擔入スル魚類果物右販売禁止セシ種類丈ケハ若干アリト雖モ悉皆買揚ケ而シ之ヲ農事試験場ヘ送り舍密ノ法ヲ以テニ物共其品柄ニ応ジテ燥若クハ□漬トナシテ貯蔵シ追テ売却セハ恐クハ該資金ヲ潰散スルニ至ラスシテ乃民心ヲ安シ五日ノ覆轍ヲ踏マサルヘシ然レハ則此策一挙兩全ト云フモ敢テ識者ノ識ヲ受サルヘシ目下焼眉ノ急ヲ看テ感泣黙止スルニ忍ヒス行文ノ拙氣ヲ省ス思ウ處ヲ盡シテ貴社ニ投ス」（「安民策」『新潟新聞』明治12年8月8日）

⑤「県下虎列刺病患者日表」

明治十二年自九月十五日正午至同十六日正午

1 罹患者千四百七十七人 内新潟港内百八十人 同港外千二百九十九人

1 新患者九十八人 内新潟港内 0 人 同港外九十八人

計千五百十五人 全治 五十人 内新潟港内 二人届漏の分 同港外四十八人

内死亡 新潟港内九人届漏の分 同港外六十五人

施療中 内新潟甲内百七人 同港外千二百八十四人

#### 参考

明治十二年自七月七日至九月十五日

總計四千二百二十二 人 内同新潟港内 四百九十三人 同港外三千七百二十九人

全治五百八人 内同新潟港内十九人 同港外四百八十九人

内死亡 同新潟甲内 三百五十六人 同港外千九百四十一人

施療中千四百七十七人 内同 新潟港内 百十八人 同港外 千二百九十九人

(「県下虎列刺病患者日表」『新潟新聞』明治12年9月19日)

#### ⑥「コレラ病予防救助有志金区役所にて九月十五日迄の取調」

一金六千四百八拾七圓拾錢内百圓以上金六百圓米商會所金五百圓鍵富三作金四百圓宛鈴木長八齋藤喜十郎金参百圓つつ村田吉藏南半之助新谷彦八白勢成熙金百五拾圓つつ高橋榮藏安宅善平金百圓つつ第四国立銀行浅井惣十郎松浦久次奥村伊榮門横山太平堺清平堀治作田邊忠藏藤井脩作岩瀬藤七荒川太二百圓以下金七拾圓西村治郎吉金五拾圓つつ會鐘治郎第四十四国立銀行支店浅井惣三郎小澤七三郎坂井久永門苅部喜平衡石本常七金三十圓つつ八木朋直本町通九番町活版屋菅野久藏湊元忠治郎松浦久藏田邊忠吉青山松藏隅木喜平内藤権兵衛片桐重藏中山藤七郎齋藤伊三郎三宮清吉清野與平大井市次小島徳十郎遠藤久藏石附柳作布川太平次坂井利吉ヤマナカ重次郎土屋忠吉郎小川皆五郎阿部彦七金貳拾五圓齋藤吉作此れ等病予防心得書三千枚此代金貳拾壹圓新潟新聞社金貳拾圓つつ石黒忠作林富吉小澤源三郎北村庄吉相澤榮吉八幡五助牧野金五郎倉田久三郎池田七藏貝谷たき苅部藤藏清水芳藏板津與十郎櫻井伊八郎杉山長五郎金拾貳圓五十錢つつ小林音藏大鹽嘉壽計金十円つつ吉田勘六本田伊平廣川與平前田武七渋谷倉藏北側惣平三宮禰平石橋禰平鈴木佐平青梅徳藏吉川又藏濱田正平片岡長太郎鈴木由太郎若月與吉高橋谷三郎高杉儀平小田又平近藤幸四郎大西治作須賀田茂平伏見市藏伏見岩藏磯部吉藏西村伊平山崎末吉渡邊門平松本由次郎白石正利中山勇二金七圓つつ佐藤七五郎森田丈吉中村りい寺井四平金六圓つつ田邊啓作野村由平金五圓つつ榎谷惣松内藤四郎次志賀佐五郎玖須口藤吉和田徳吉藤田孝造福島伊八野村由藏黒川榮松高橋祇禰三治松浦五平鍵富藤吉小山甚六濱田金三郎金四圓拾錢超願寺住職金貳圓木谷由藏金壹圓光林寺住職金五圓奥村門平金五圓見崎甚四郎

(「コレラ病

予防救助有志金区役所にて九月十五日迄の取調」『新潟新聞』明治12年9月19日)

⑦「目今米価も高値なるに時も亦嚴寒にして多く貧民ノ飢寒に陥るを憐れみ西蒲原郡巻村に於ては此程南須原、笛木館源等の諸氏を始め地主重立の有志者結合し戸長澤栗氏と相図り同村の貧民を取調ふるに差向き飢餓に迫るもの四十戸程も之あるよしにつき各自応分の金を募集し白米貳百五十俵を買入れ向ふ百日間の見込みを以て同署長嚴寺の庫裏を借り受け有志の内交番にて二名つつ同寺へ詰め粥を煮て施行せらるる美挙を好として郡長雨宮氏も親しく其場に臨み其厚意



を深く賞賛し且其勞を謝せられたり猶此上にも有志を募り正米にて施與せんとの美舉を聞きて加入を乞うもの続々と増殖すとは不日其舉に至らんとぞ濟貧救恤は世上の義務とは云ながら斯く慈善家の輩出するは昭代の美事なるかな」（『新潟新聞』明治13年1月22日）

⑧「新潟区役所にては方今米価の高値なるに細民の貧苦を深く洞察せられて今般曙町の上田陸藏の宅を借受けらず貧民横七番丁〇〇〇〇外八十三二人へ粥三飯つつ日々救はるるにより昨日其鑑札を附與せらる但し一人に付き日に二合五勺の見積なりとぞ然して其掛りは区書記安藤□？ 禰氏と鈴木三十郎川島勝信の両氏にて猶細民を□取調中なりといふ」（『新潟新聞』明治13年2月8日）

⑨「区書記藤井忠太郎氏は去る十日窮民数十名へ救助として米三石を施與せられたり毎度□奇特の事」

（『新潟新聞』明治13年2月13日）

⑩「俗人は節分に福は内鬼は外と大切な豆を蒔き散すか爰には奇特な米蒔話し北魚沼郡小出島にて何者なるか去る節分の夜に白米五升つつ木綿袋に入れのしと書き付けて市中の貧民大凡そ五十軒程の戸口へ投げ込み歩きしものありと米持の御方には能い節分陰徳あれば陽報あり鬼は外へと叫はずとも必らず福は内へ来らん」

（『新潟新聞』明治13年2月13日）

⑪「又も新潟窮民へ救助として白米一石を出されしは本町通十二番丁若月與吉氏にて金一圓を同じく出されしは古町通十二番丁の鍋谷清吉氏なり何れもは奇特の事喋そ貧民は喜悅するでありませう」

（『新潟新聞』明治13年2月14日）

⑫「西蒲原郡小新村にては客年水害以降より村民は殊の外困窮して居たりしに本月の或る夜中に頃何者なるか細民の扉を敲き呼び出して難渋の聊か見舞なりとて数戸へ一封宛の金子を投與して去りしものは其折顔を隠して誰とも予定し難けれども多くは同村の味噌屋大黒氏であろうとの風聞左りとは感心の人なりき」

（『新潟新聞』明治13年2月14日）

⑬「慈善者の続々顕出するは最も喜ばしきことにて又々新潟窮民へ救助ありし人々は本町通十二番丁菅野久藏（白米二石）同通り十四番丁八雲與平（沢庵漬二桶）旭町通一番丁小島録太郎（梅干一斗）にてありし」

（『新潟新聞』明治13年2月15日）

⑭「本港の綿商惣代大西治治郎氏始め外四十八名にて金百圓神宮教会所より金十圓本町通十二番丁田邊忠吉氏より白米一石新潟区書記中山勇二氏より味噌二樽を窮民へ施与せられたり例ながら□奇特の事」

（『新潟新聞』明治13年2月19日）

⑮「古町通り十三番町の鹽谷勇吉は沢庵漬一樽同通り一番町の野村豊穂は金十圓を窮民救恤場へさし出されたり」

（『新潟新聞』明治13年3月16日）

⑯「又かの貧民〇〇〇〇〇へ恵贈ありしは中島さん（金一圓）山の上の某さん（金五十錢）新道八番丁森田屋より（白米一斗味噌一貫目）同所八番丁若井屋より（會津炭一俵金十錢）名前知れざる某さん（米一斗）でありたり」（『新潟新聞』明治13年3月23日）

⑰「如何なる名医の妙恤でも馬鹿の病には困るとかや近頃市中の馬鹿連が自分の懶惰を棚に上げ米価の騰貴を豪商の罪と思ひて色々の張り札投文卑怯にも暗夜に乗して金持の戸口に張り付け窓より投げ込み吾等の貧苦は皆こと□□□□汝等が為に出るぞや米の輸出を止めされは焼くの毀はすと空威し餘りの事に其筋では内々探索なさるよし馬鹿共早く後悔なし悪戯止めと其中に厳しい詮議に逢ふ坂の坂より重き難渋に罹るは記者の受合なり若し又苦情があるならば卑怯な

張り札投文はさらりと止めて公然と上に願ふぞ男なれ」 (『新潟新聞』明治13年3月28日)

⑮「上大川前通り久番町の松岡長九郎は味噌二十貫目を貧民救恤場へ施与せられたり」

(『新潟新聞』明治13年4月1日)

⑯「貧民の困難は即ち困難なりと雖ども救恤能く行届き且つ有志者の盡力に依て人間必需の米価の騰貴を牽制せし故に先つ米価は据りの姿なるを以て人気も少々落付きたり又た出火後は人夫の日料頗る高く大工木挽か一日五十銭以上手間取りが一日四十銭位なれば貧民の困難も少しは薄かるべし又た本港の材木屋は非常の騰貴を望んでの故か品切れなりとて需めに應せず強いてこれを求むるあれば非常の高値に言いかけしが此頃官林拂下げ云々の足音を聞き込み大に失望したりぞ憎むべし」 (『新潟新聞』明治13年8月21日)

⑰「南部信近君が去る八日より白米一升十一銭つつに売出されたるは既に號外に掲載せしが又た作二十日には一人に白米三升を限り一升八銭つつの割を以て売り出されたるか故に門前に非常

⑱「今回の失火に付罹災人へ救恤せし慈善者は左の通 金二十五圓高橋純吉、金二十圓白石正利、金二十圓武山屯、金二十圓佐々木松坪、金二十圓岡絲七内、」金二十圓北蒲原郡菅得四郎、金二十圓権平半七、金十五圓南部方貞、金十三圓井上正貞、金十圓中山勇二、金十圓笹岡兼太郎、金十圓武内省三、金十圓井上宗桓、金十圓柴田敬恭、金十圓藤宮三九郎、金十圓廣川よき、金三十圓山中休助、大木淳四郎、矢口六兵衛、金十圓清水芳藏、金二十圓山口村大澤口、金五圓黒川榮松、金五圓眞柄孝、金五圓本庄立輔、金五圓須藤賢與、金五圓矢沢鞆治、金五圓木村眞吾、白米一石辛甘組、金五圓清水甚口、金三圓奥野正次、金三圓高山口、板橋敬齊、金三圓福田とめ、金二圓大圓寺、金一圓川崎甚藏、金一圓近藤貞六、金一圓伊藤信厚、枇杷葉湯施し樽村卯之吉、金十三圓藤井楯雄、金十圓本田伊平、金一圓下所口田、竹石與四郎、金一圓山崎市平、金三十圓栗林重三郎、白米四斗栗林祐吉、金五圓五十嵐吉平、金二十圓倉田久三郎、金一圓五十銭佐藤為利、金二圓大江一學、金二圓高野為隆、味噌五十貫目女池新田佐藤岩藏、金五百圓金子新田白勢長衛、金五百圓大王新田市島徳治郎、金一圓下所新田竹石九平、金三十圓新発田第百十六銀行、四間苦七十五枚空俵五十二箇女池新田大阪清次、金二十五圓代盲人組合、金十圓宮寄上村中野潔、金五圓野村由藏」 (『新潟新聞』明治13年8月21日)

⑳「去る七日の火災に三菱物産の両會社が非常の盡力にて貧民へ救助されしは過日の紙上にも掲げしが此頃両社より区役所へ出せし書上を見るに施飯の日限は九日より十三日まで都合五日間にて其雑用出費は一千百五十二圓四十六銭四厘にて此内金七百五十圓は三菱會社にて持ち残り金四百二圓四十六銭四厘を新潟物産會社にて出金せりとありました」

(『新潟新聞』明治13年8月26日)

㉑「焼け出されの窮民共へ與へられし焚出米は最初十五日間は握飯なりしも餘り乞者の大勢なるより中々長い間継ぐべくもあらされば其後じゃ粥と改めしが是も亦た去る二日切りにて一先廃られたり然るに今まで焚出を仰ぎし者の内にて未だ渡世の業もなく即時飢餓に陥る程の者も多ければ如此者の内にて極々の貧乏者に限り一昨三日区役所より有志施與金の内より二千圓丈を割賦させたり其貧乏中極貧なる者のみにて其數無慮五百三十四戸人口二千五十人なりし右割賦の法は二千圓を七分三分の割にて二つに別け三分を以て戸数に付け七分を以て頭数と定め右戸

数割にして一戸の所得金一圓十二錢二厘となり人口割は一人六十八錢八厘となりたり外に焼死人六名（即死三入院後死三）へは金七圓つつ分てりといふ」（『新潟新聞』明治13年9月5日）

②④「又一昨日までに集まりし罹災人民救助金は五千圓うち白米三十九石三斗を一升十三錢の割に直して込む別に宮内省よりの千圓を加えて都合六千圓なり」（『新潟新聞』明治13年9月5日）

②⑤「西堀、豊照、鐘淵の三校は窮民の立退場とされしり餘り長く休業するに依て先頃昨日までに立退きおき様達せられしが未だ方向も定まらざる族の多ければ今少しの内其なりに差措れ別に田中町へ救助小屋を新設し出来次第引拂ひになるといふ」（『新潟新聞』明治13年9月5日）

②⑥「本港芳町（豊照校前）の貧民救助小屋は此程区役所にて格別の御注意ありて夫々修繕を加へ手狭の所は更に建築して貸與へられるるよしにて既に測量も済み昨日頃は材木も積下り□□のうち作事に着手の都合なりと貧民等は此事を聞き一昨夜は前祝ひなどと言皮膚らしい致道濁酒を傾け例の迫分に甚句と互ひに唄ひ合ひ喜悅の眉を開きしと」（『新潟新聞』明治13年11月21日）

②⑦「東燃の物価騰貴にて人民の困難なることは何地も同じ秋なるが日曜欠べからざるの物品は是非購なはざればならず目下人々の常食たる沢庵漬の漬込み最中なれども大根や鹽の高値なるは平年に比すれば殆んど幾倍という騰貴にて十分の仕込みも出来ざる程の情状ながらも一年中の惣菜なるものを十分にせざれば自然と一年の経費に多少の関渉あるを以て泣□も仕込まざるを得ざるの事なりしが本町通り六番町の八幡五助上大川前通り五番町の□橋吉蔵の両氏が責ての事に□なりとも安値に売り渡し貧民の困難を一時救はんとて両氏の自宅を西堀通り三番町山田二八東堀通り十番町浅井惣十郎湊町通り一丁目鍋十等の五カ所にて去る一日より何程なりとも人々の望みに任せ鹽一升到付き一錢何厘つつとかの割安にて販売さるるよし実に両氏の奇特なるは感賞に堪へず」（『新潟新聞』明治13年12月4日）

②⑧当時女紅場に居る貧乏人が色々の戯言を吐て救ひを乞ふ者の内に極貧の者三名と外九名の按摩が連盟にて此程の寒天に向ひても商売は閑暇なり衣物は着のみ着たままの始末ゆえ赤くないお仕着せの一枚つつも下さる様にと願ひ出しとかで昨日区長が女紅場へ出張され其方ともは是まで度々の御救いを受けながら未だに渡世のもむてきも立たず上の御救いあればとて夫を好き事に心得てかく便々と日を暮らすは如何の心得にや全体其方どもは何時までには善すぎ生活の道も立べき見當にて上の救助を仰ぎ居るやと詞を盡して諭さると按摩の中より○○○○といふ盲目坊主が□點の事ながら如何にせん今日の有様では実に奉公も立かねますに因て今六十日もお□粥を頂き其上綿入れの一枚も頂戴いたします内は何とか仕方も立べき事と心得居り候と立板に水を流す如く洒々として申立垂れは区長様にも餘程お困却の容子に見えられしとホンに盲目の向ふ見ずと貧乏人の糞度胸は可憐□ふでもあるが持あました者だワイ」

（『新潟新聞』明治13年12月12日）

②⑨「人心の反復は秋の日よりに似て善と思ひば悪と化し悪と思ひば善となり雨天かと思ひば快晴となるは実に測るへからざる理はりなるかな爰に本港西堀通り五番町寄留の本縣士族山田富至氏は曩に獄丁を奉職し勤務中何か不都合の廉ありとて免の字を蒙むられしも追々改心して先づ第一着に方今の物価騰貴に際し貧民の困難を憂へ今度区役所の許可を得て十七番丁高橋治太郎の土蔵の前にて白米一升到付き一錢二厘安の割合を以て貧民へ売渡さるるとは新聞屋も感心い



たします」 (『新潟新聞』明治13年12月15日)

③⑩「日外の新聞にも書載ました本港の貧民(三十戸許り)ども区役所より一戸に付き金五十圓つつお貸し渡しになりたれば貧民どもは早速湊町通り四丁目浅草観音さんの門前地へ居宅を新築せしかば最はや普請も出来上り表家七戸丈けは一昨十三日引移りも済みたれば一同は喜び合ひお上のお情けは有難きなどと嬉し涙を盈せしは所謂の小人は使へ難ふして喜はしめ易しの譯ならんか」 (『新潟新聞』明治13年12月15日)

③⑪「古町通り五番町の橋詰めなる旅籠営業秋田屋清六氏は當今の米価の高値は非常なりとて貧民の難渋を憂へ昨二十一日より同三十日まで十日の間西湊町通り二番町即ち米社の向なる金子金太郎店にて白米一升に付き十一錢三厘の割り安にて貧民へ売り渡さるよし」

(『新潟新聞』明治13年12月22日)

③⑫「過日の紙上にも記載せし芳町豊照校前の貧民お救ひ長屋四棟の中二棟は普請も出来上り一昨日頃は大部分引移りとなり一同は喜び居るよし」 (『新潟新聞』明治13年12月24日)

③⑬「過日来屢々紙上に掲載せし本港芳町なる豊照町の貧民お救ひ長屋の建築は既に落成にて貧民も大抵は引移りしよしなるが一昨日二十七日の午後六時二十分頃は風も途止みて静かなりしが四棟の長屋の中一と棟がミシリミシリの音と共に傾がり出すにぞ貧民は驚きて戸外へ駆出す間もなく中の一と棟はピッシャリ平に潰れけるが近所の者は其物音に喫驚して駆付け見ると右の体ゆえサア大変火事ぢやぢやと鳴立つるを弊社の仙作は種拾ひの用事にて其處へ通り懸り立寄り見ると該長屋の者は丁度晩飯の眞最中なれば飯茶碗を投げ箸を捨て跣足にて逃げ出し雪の中でブルブル震へながら騒いで居りしが早くも長屋の中頃よりにして眞物にはならざりしも何んでも此邊に押し潰されし者ありとて大勢かかって堀出せば案のごとく庇しの下に挟まれて怪我せし者は〇〇〇〇の妻〇〇(三十五) 長男〇〇〇(十三年) 〇〇〇〇〇(四十四年) 〇〇〇〇(二十五年)の四名にて即死は向へ長屋の〇〇〇〇〇長女〇〇(三十二年)の一名なりしが右の騒ぎに付き仙作も肝心の商売も打忘れ突然飛込んで潰されし人を救援せんとして百方周旋なし此の趣きを早速池津寅吉外六名にて分署へ届け出ると直ちに数名の査公が出張せられ其場に居合せし人々と等しく力を合わせて盡力されしが追々其掛りの齋藤莊三郎、畑彌吉、醫員某五番組火防夫等も駆来りて皆々非常の盡力にて漸やく鎮静に至りしは昨日の前一時なりとぞ」

(『新潟新聞』明治13年12月29日)

③⑭「本港芳町の貧民御救ひ長屋潰れし騒ぎに付き役員の外非常の盡力せし人々は、若木珍内、池津寅吉、齋藤倉蔵、亀屋徳藏、荒川久平、鍋谷新吉、間瀬津七の七名にて其他舟場町橋詰に寄集り居たる丁持連の十五名なりとぞ又た即死せし〇〇母〇〇金七圓又た怪我人中中〇〇〇〇二圓四拾七錢八厘〇〇〇〇〇金三圓八拾四錢四厘佐藤〇〇同断の四名へ区役所より扶食料としてお手当ありしと」 (『新潟新聞』明治13年12月30日)

③⑮「是れも同じく同日の降雪にて大畑家通り舊營所の玄関二ヶ所が潰れ又た本港にて不潔の名も高かりし西堀前通り二番町の土屋某の所有なる長屋(乞食長屋)一棟が丸潰れとなりましたが今どは立替になるとか」 (『新潟新聞』明治13年12月30日)

③⑯「出雲崎の嘶し」

「物価非常に騰貴し下等輩は窮迫を加ふるに数日間海上は荒れ漁師は一層困難を生じ中に五六日間も飲食をしないで居るものもある位にて目もあてられぬ程なりしを同町の或る慈善者が發起して有志を募り若干の喜捨を出して大人には白米三合小人には同二合つつ毎日施與せられますは如何にも賞賛すべきことなりこの慈善者とは誰のことなるや聞洩せり惜むべし」

（『新潟新聞』明治13年12月30日）

注）判読不明については□で、匿名にすべきところは○で表記した。